

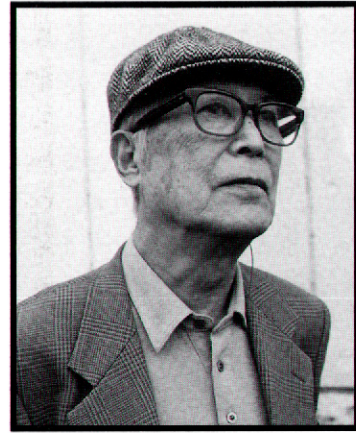
齊藤国治先生をおくる

牧田 貢

齊藤国治先生と東京天文台で特にお近づきになったのは、昭和45年(1970)のメキシコ日食にお供した頃からである。先生は世界の大多数の観測隊がミヤワトランという高地に観測地を定めたのに対して、海岸の小港プエルトエスコンディドを観測条件最適地として選ばれた。当日3月7日は両観測地とも快晴、勝負はアイコであった。

先生のお名前が欧文報告に初めて登場するのは、田中(務)・長沢・齊藤の連名で、三鷹塔望遠鏡で得た黒点スペクトル中に分子を同定したもの(1939)であろう。これは同時に発表された田中(務)・高木の黒点磁場測定と共に我国観測天体物理学の嚆矢となる世界レベルの研究であり、私はこの存在をアメリカでオランダ人から教えられた。先生に別刷を無心した折に「これは最後の1部だ」と言われて頂戴したように記憶するが、その後のご研究が異なった方向に向かわれたせいか、特に内容についてコメントされなかった。因みに論文の発表された昭和14年は先生ご結婚の年ときいている。

敗戦後の結核闘病期を乗り越えられた後は、戦争中に何回か参加されたことのある日食観測に集中され、太陽活動周期11年を上回る期間にわたってコロナの明さを測り続けられた。このデータは後世に残るものであろう。先生の解析で私の印象に残っているのは、polar rayの観測から「太陽の極は禿げている」といわれたこと(1965)、Saito-Billings(1964)でcoronal loopの形を三次元で示して見せたことである。昭和41年(1966)私がバサデナに居たとき、クウェーサーの発見者の一人であるシュミット氏が私のところにやってきて、昔オランダでコロナの偏光観測をしていたのだと自身の古い論文を見せてくれた。「自分は3連望遠鏡を使ったが、Saitoは4連で成果を挙げた」というようなことを言われて、オランダ人の情報調査には改めて驚かされた。ご停年を控えた昭和48年(1973)



齊藤国治先生

1913年	東京に生まれる
1936年	東京大学理学部天文学科卒業 北見地方の皆既日食観測(最初)
1964年	東京大学東京天文台教授に
1973年-75年	日本天文学会理事長
1970年	メキシコ日食観測(最後)
1974年	東京大学東京天文台教授を定年退官 以後「古天文学」を創始する
2003年	2月21日逝去(89歳)

のアフリカ・モーリタニア日食には10回目の日食観測ということで参加に執念を示されたが、健康上の理由で周囲から思い止まらされた。しかし、50度の炎熱、砂嵐の埃にかすんだ当日のコロナからすれば、結果的に先生にとって良かったと思っている。

先生はご退官前から我国における天文観測の歴史に興味をもたれ、明治以降の日食・ハレー彗星・金星日面通過等の古記録を調査しておられたが、ご退官後はパソコンを購入されてもっと古い和漢の古記録にある天文現象の検証に向かわれた。「古天文学を拓いた」と自負されていたが、これは先人たちが散発的にやっていた天文学的検証を大々的に実行され、お得意の文筆力をもって結果を広く紹介されたものである。「大学生協で安く買



ラエ皆既日食（1962年）
四連カメラと齊藤先生

うことができた”と中国で出版された中国正史シリーズを楽しそうに見せて下さった。我国・中国・朝鮮等の古典を不自由な眼で丹念に読破された。検証の結果をまとめて発表する楽しみのため「歩くこと」を犠牲にして車椅子の身になられたと聞いている。

ご退官の際に有志でご希望のプレハブ書庫をさしあげた。できたからと呼ばれて行ってみると、書籍の他にダンボール箱がいくつも格納されていた。なんでも小学生の頃からの日記だそうで、中には中学生の時に書いた小説も含まれているという。日頃から「書く」ことを何とも思われない先生だとは思っていたが、びっくり、早い話、私はここまで書いてくるのに何度もつかえている。「刻苦精励」という言葉があるが、先生の場合は「楽しいので精励」しておられる。でなければ長続きする筈がない、というのが私の合点であった。

書くことに限らず、いつでもすることを見つけて、マメにそれを楽しまれた先生であるが、道具を扱うのは苦手で、何でもシッカリと掴まれるクセを持っておられたようである。先生の使われたレンズやフィルターは指紋だらけだったとか、そういえば、メキシコ日食で観測装置の設営や撤収時、監督はさ

れるが手は出されなかった。最初はお年のせいと思っていたのだが、本当は遠慮しておられたらしい。また、時たま、相当な被害者意識に囚われることがあって、そんなことドーンと構えて取り合わなければ良いのと思うことがあった。怠け者の私にとって向こう側の人に見えた先生が、不謹慎ながら、こちら側の人と思えた次第である。

小学生時代から続けられた「書く」ことは、物事やご自身をすなおに表現する術に磨きをかけられたようである。小惑星「KUNIJ」を贈られたこと、私も加わらせて頂いたお別れの席は悲しみの中にも“和やか”であったこと、は先生のこうして形づくられたお人柄を映したものと思う。ご退官間際に天文台南を流れる野川の改修工事の話があり、野川の歴史を遺すためにそこにかかる何本（10？）かの橋のスケッチを散歩毎にされていた。またご退官直後には東京中の名所旧跡（？）を風潰しに歩かれ、ご自身を見事にシェイプアップされた。健康上の全てのハンディから解放された今、今度はどんなことを見つけて楽しんでおられるのだろうか、やがて行く身の私、いつの日かお目にかかりたいと思っている。

（大阪学院短大）

齊藤国治先生の思い出

平山 淳

齊藤国治先生の訃報をきいて、充実した静かな90年の人生をおくられたのだと言う感を深くする。最後に先生と電話でお話したのは去年の6月だった。中国の天文学は、ギリシャなどから受け継いだのか独自のものか、を知りたいと言う友人がいたので早速お伺いを立てたのである。齊藤先生は「独自に発達したことになっていますよ」といわれた。そこで、私は先生の1970年に旧東京天文台のAnnalsに発表されたコロナの穴の古典的論文を使わしていただいて格闘している最中ですとお話した。「Yokoh 10年」の論文を書いていた最中であった。実はこの原稿を書いている時点でも齊藤論文と太陽風の関係を調べているのである。スイスのWaldmeier博士の発見した暗い「コロナホール」は、比較的温度が低いのにそこからより速い太陽風が流れて出ているので、いまホットなテーマになっているのである。齊藤論文はその暗くて良くみえないホールの難しい密度決定を試みさせた逸品である。それで一層、天寿をまっとうするとはこういうことなのかという思いがするのである。

先生とは二回にわたって皆既日食観測に御一緒した。一回は1962年2月5日ニューギニアのラエだった。1000トンくらいの鹿児島大学の練習船で10日ほどゆれに揺られていった。私は酔ってしまうので食事がつらくて直ぐ船室に駆け戻ってベットに寝ていたのだが、先生は船長などと食事もゆっくり談笑しておられた。悔しかったので先生たちの三半規管は精巧でないためだ、と理屈をつけていた。

先生は秦茂さんとともにコロナの直線偏光を写真観測する4連の望遠鏡をもってこられた。日江井栄二郎さんと私は彩層の分光観測、フラッシュスペクトルの連続撮影である。アメリカ隊は冷房の効いたトレーラーを持ち込んで日本隊の装置とは雲泥の差があった。J. T. Jefferies, R. G. Athay,

J. W. Firor, 全ての光学系を設計した団長のR. B. Dunn氏など極めて強力な全アメリカ軍とも云うべき部隊で、フラッシュスペクトル撮影であった。当時はコロナより、彩層が面白いと言う時代であった。しかるに30年後のYokohはコロナだけをみる衛星だったし、まだ分からないから次期衛星のSolar-Bで光球とコロナを同時に観測して因果関係をはっきりさせたいとしているのである。

日食当日の朝は曇っていたが皆既直前になって晴れ上がり、齊藤組、川口市郎さんらの京大隊、当時水路部だった大脇組、アメリカ隊は大成功を収めた。私たちの大きなムービーカメラは晴れたとたんフィルムが絡まって動かなくなり完全な敗退だった。しかも日食直前に大フレアが太陽の縁で起こっていたので、今にして思えば彩層から蒸発した千万度のプラズマが、齊藤組のプレートに明るいコロナのhelmet streamerとして記録された。超新星1987Aほどでないにしても、やはり天はしっかりと見ていて、ご褒美を用意するのであろう。後に先生はこれを持って米国ボールダー市のHAO (High Altitude Observatory)へ赴きTandberg-Hanssen氏とともに解析された。他にもHAOの人と、全て先生の確かな日食観測データで三つの有名な共著論文がでている。

二回目は1966年10月12日の日食で、齊藤団長の下、ペルーのアレキパ市近郊の標高3000mの村で観測した。齊藤・秦組は同じ4連の望遠鏡を二組(外部コロナ用と内部コロナ用)、日江井・平山組は雪辱をはたすべくフラッシュスペクトル観測を行い、この時は両方とも成功し論文もだいたい書かれた。アレキパ市で商工会議所か何かが主催して我々の歓迎パーティが開かれたのであるが、そのとき齊藤先生はスペイン語で堂々と挨拶をされ日食の説明までされた。フランス語もお出来になるとは聞いて

ていたが、新たにスペイン語も勉強したとのことであった。齊藤先生は健康が優れなかったにもかかわらず、11年周期にわたってコロナの観測・解析をしたいと考えておられ、前後にわたり山下泰正氏や牧田貢氏に助けられてその意志が継がれた。

先生の最初の論文は、多分萩原雄祐先生との共著の論文で、1939年の東京天文台 *Annals* に1936年の日食観測の結果を出されている。B. Lyot に捧げられた *The Sun* (1953年) に H.C. van de Hulst の「彩層とコロナ」の章があるが、二つの論文が引用されている。その一つは東京天文台の *Bulletin* (1948) に載ったもので、コロナの偏光の傾きが齊藤は「小さいと出しているから(確かだろう)」と書いてある。立派な論文であれば、*Bulletin* でも読む人は見ているのである。van de Hulst は大学院生の時に 21 cm 電波を予言し、コロナの観測を博士論文にした人だが、この素晴らしいレビューに登場する人は B. Lyot のほか、ノーベル賞の H. Alfvén と M. Ryle, 太陽の本も書いた F. Hoyle, クェーサーの発見者 M. Schmidt, I.S. Shklovsky, L. Bierman, M. Schwarzschild とまぶしいばかりの顔ぶれである。そこに齊藤先生のほか宮本正太郎先生などがあり、日本人の被引用率は最近よりはずっと高い。ちなみにこれらの大先生たちは、コロナが百万度である理由が分かったからではなく、分からないままにほかの面白いことに転じたのである。私は最近「分かった」と思うようになったが、誰も信用してくれない (IAU Symp. 203, 495)。狼少

年は、この半世紀の間に千回は現れただろうから無理もない。

このところ私は勤め先で一般天文学の授業もしており、齊藤先生の「古天文学」の話も加えている。しかし分からない点も多々あり、お宅に伺った時に教わった。部屋の中の書棚は「明月記」だの難しそうな漢籍・和書が壁いっぱい並んでおり、天体物理の本はどこにも見当たらなかった。奥様はお金がかかるのですよといわれた。天文台を退官後その方面の本を9冊書かれたそうだが、岩波新書の「星の古記録」お薦め品である。話しているうちに「平山君、君もやりませんか」といわれた。惑星などの軌道の計算なら少し勉強すればできるだろうが、大変なのは虫食い・崩し字から始まって、「天文博士」が見てもいない天体現象を述べたりする環境など、一夕一朝では身に付かない学殖がなければできないだろう。しかも先生は、例えば神田茂著「日本天文史料」に載っている事例のほとんど全部を調べ尽くされたらしい。「それは無理ですよ」と答えて、御著書の「定家『明月記』の天文記録—古天文学による解釈—」(慶友社1999年)を頂戴して退散し、自分の本棚の手が届かない高い所にうやうやしく置いたのである。一緒にいただいた「青淵」平成11年2月号に書かれた記事を今読むと、7176番の小惑星に Kuniji という名前が付けられたが「自分の名の付いた小天体が宇宙を飛び回っているのは心楽しい限りです」とあった。合掌。

(明星大学・元国立天文台)